ＥＳＤ・ユネスコスクールの普及・推進に資する
教育学研究科における取り組み及び評価に関する研究

研究代表者　柴　　一実（初等カリキュラム開発講座）
研究分担者　朝倉　　淳（初等カリキュラム開発講座）
富川　　光（自然システム教育学講座）
深澤　清治（英語文化教育学講座）
由井　義通（社会認識教育学講座）
中井　悠加（国語文化教育学講座）

Ⅰ　研究の背景と目的

１．研究の背景

2002 年９月に，南アフリカのヨハネスブルクにおいて「持続可能な開発に関するサミット」が開催され，当時の小泉純一郎内閣総理大臣（日本）が 2005 年から始まる 10 年を「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」とすることを提案した。2014 年がその最終年に当たり，これまでの集大成として 2014 年 11 月４日から８日にかけて，ESD・ユネスコ世界会議・ステークホルダー会議が岡山市において開催された。引き続き 11 月 10 日から 12 日にかけては，ESD・ユネスコ世界会議が名古屋市において開催された。この 10 年間に持続可能な開発のための教育，通称 ESD は，小・中・高等学校におけるすべての教科にとって重要な課題となり，各学校段階，また各教科や教科外活動において様々な取り組みがなされるようになった。それに応じて，大学の果たすべき役割も大きくなってきたのである。

２．研究の目的

本研究の目的は，ユネスコスクール大学間支援ネットワーク（ASPUnivNet）の一員として広島大学大学院教育学研究科が平成 26 年度に行った諸活動を検証することである。具体的には，広島県及び山口県内の学校のユネスコスクール加盟申請書の支援や研究会の実施など， ESD・ユネスコスクールの普及・推進に関する教育学研究科の取り組みを明らかにし，本年度の活動を検証することを目的とする。

（柴　一実*）

Ⅱ　平成 26 年度における教育学研究科ユネスコスクール委員会の取り組み

１．ユネスコスクール加盟申請支援

本年度は，広島市立神崎小学校，英数学館高等学校，広陵学園広陵高等学校，広島大学附属東雲小学校，野田学園中学高等学校，周南市立和田中学校の６校のユネスコスクール加盟のための申請書作成を支援した。

２．日本／ユネスコパートナーシップ事業への参加

ASPUnivNet の第１回連絡会議（平成 26 年７月５日），第２回連絡会議（11 月７日），第３回連絡会議（平成 27 年１月 25 日）にユネスコスクール委員会委員（柴，富川，朝倉）

が出席し，ユネスコスクール加盟大学との交流及び情報収集を図った。

３．ＥＳＤ・ユネスコスクール研究会の実施

平成 26 年９月 28 日，広島大学大学院教育学研究科第一会議室を会場として，ESD・ユネスコスクールに関する研究会を開催した。研究会のテーマは「世界をつなぐ持続可能な開発のための教育」で，３名の講演者を招待した。講演者と演題は次の通りである。

(１)NPO シャンティ山口事務局長・佐伯昭夫氏，演題：ラオス・タイ国境地域で暮らす民族の自立支援活動。

(２)広島大学附属中高等学校教諭・日浦美智代氏，演題：ESD の視点からの家庭生活に関する学習の転換。

(３)広島大学大学院国際協力研究科准教授・小塚英治氏，演題：開発途上国における教育開発の課題と国際社会の取り組み。

当日の参加者は 46 名で，内訳は小・中・高等学校教員（15 名），大学生・大学院生（11 名），大学教員（13 名），教育委員会関係者（４名），広島ユネスコ協会関係者（２名）などであった。事後のアンケート調査から，参加者が有意義な研究会であったと評価したことが示された。

４．第６回ユネスコスクール全国大会への参加

平成 26 年 11 月８日，岡山大学を会場として開催されたユネスコスクール全国大会において，「テーマ別交流研修会」が実施された。第 22 分科会では，「教師が『つながる』・教育活動を『つなげる』－ユネスコスクールとして取り組んだ ESD の 10 年－」という演題で広島大学附属中・高等学校教諭・藤原隆範氏による実践報告が行われた。本研究科ユネスコスクール委員会委員（朝倉）がファシリテーターとして参画し，同分科会の司会進行を務め，好評を得た。

５．ユネスコ世界会議への参加

世界各国のユネスコ大使が参加した名古屋世界会議での「ESD の 10 年」に関する総括では，今後も ESD を推進することやそのためには教育の重要性が再確認された。また，各地のユネスコスクールや大学などの教育機関，あるいは国際理解協会や様々な NGO・企業などの研究成果・活動成果が発表されて，今後の活動の示唆を得た。

６．平成 26 年度東広島 ESD 研究大会への参加

平成 26 年 11 月 14 日，東広島市中央生涯学習センターを会場として開催された平成 26 年度東広島 ESD 研究大会において，本研究科ユネスコスクール委員会委員（中井）がパネリストとして参画し，ESD・ユネスコスクールの普及・推進に関する広島大学大学院教育学研究科での取り組みについて発表した。この発表により，ESD 推進に向けて大学が果たすべき役割について，教育現場から様々な期待と要望が出された。

（柴　一実*）

Ⅲ　世界大会から見たＥＳＤ・ユネスコスクールの現状と課題

１．ユネスコスクール世界大会－第６回ユネスコスクール全国大会－の概要

平成26年11月８日，岡山大学を会場として，文部科学省／日本ユネスコ国内委員会が主催する標記の大会が開催された。大会テーマは「ESDのさらなる発展を目指して－2014年を越えて－」であった。大会の主な内容，概要は次のとおりである。

開会式　岡山市小学生開会宣言
挨拶　文部科学副大臣　日本ユネスコ国内委員会会長　岡山市長
ESD推進のためのユネスコスクール宣言
ESDメッセージソング「僕らは大きな世界の一粒の命」
全体会Ⅰ：第５回ESD大賞授賞式
　　受賞校事例発表
　　文部科学大臣賞　岡山県岡山市立京山中学校
　　ユネスコスクール最優秀賞　広島県広島大学附属中学校・高等学校
　　国内交流の実践，及び海外交流の実践，ESD Riceプロジェクト
分科会Ⅰ：テーマ別交流研修会
分科会Ⅱ：ESD博覧会
全体会Ⅱ：閉会式　宣言最終案発表　閉会宣言

２．ＥＳＤ・ユネスコスクールの現状と課題

ユネスコスクールは，ユネスコの理念を実現するため平和や国際的な連携を実践する学校と位置付けられており，加盟校は世界で9,633校(平成25年６月現在)，日本国内615校(平成25年７月現在)に上るとされている(ユネスコスクール/日本ユネスコ国内委員会Webページ)。

文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会は，ユネスコスクールをESDの推進拠点として位置付けており，我が国のESDの普及，発展はユネスコスクールを中心に実現してきたと言えるであろう。「2014年ユネスコスクールESD優良実践事例集」(文部科学省/日本ユネスコ国内委員会，2014a)には，各学校種のユネスコスクールにおける優れた実践事例が紹介されている。また，この大会において参加者により採択された「ESD推進のためのユネスコスクール宣言(ユネスコスクール岡山宣言)」(宣言案　Version２)にも，日本のユネスコスクールによる「国連ESDの10年」の成果として，プロジェクト・カリキュラムの開発や実践，認識の共有，連携の深まりなどが示されている。

一方で世界大会において確認された課題もある。たとえば，ユネスコスクールのESDを学校全体の取り組みとして継続，発展させていくことである。また，ESDをユネスコスクール以外の学校や地域へと広げていくことである。そのための，教育課程づくり，評価方法の検討，基盤整備や研修制度の拡充，連携強化などが求められている。

（朝倉　淳*）

Ⅳ　ＥＳＤ・ユネスコスクール研究会の実施と評価

１．実施日時・会場等

日時：平成26年９月28日（日）13時00分～16時30分
会場：広島大学教育学研究科 第一会議室（広島県東広島市）
主催：広島大学大学院教育学研究科ユネスコ・スクール委員会
共催：広島ESDユネスコスクール研究会
後援：広島県教育委員会，広島市教育委員会，東広島市教育委員会，ASPUnivNet，公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

２．プログラム

講演１（13：10～13：50）：ラオス・タイの国境地域で暮らす民族の自立支援活動
　NPO法人シャンティ山口・事務局長　佐伯昭夫氏
講演２（13：50～14：30）：ESDの視点からの家庭生活に関する学習の転換
　広島大学附属中・高等学校教諭　日浦美智代氏
講演３（14：30～15：10）：開発途上国における教育開発の課題と国際社会の取り組み
　広島大学大学院国際協力研究科特任准教授　小塚英治氏
全体討論（15：30～16：30）

３．講演内容

講演１「ラオス・タイの国境地域で暮らす民族の自立支援活動」
　佐伯昭夫氏（NPO法人シャンティ山口・事務局長）

モン族は古くから東南アジアに居住している民族の一つであるが，1960年代のラオス内戦の戦火から逃れるためにラオス人民民主共和国とタイ王国の国境地域に移り住んだ。モン族は急峻で過酷な山林を開墾し，焼き畑農業を行っていたが，自給自足の陸稲と野菜のみの食糧事情により，特に老人や子どもの栄養失調や伝染病の蔓延が常に生活を脅かしていた。本講演では，NPO法人シャンティ山口による教育を中心とした生活全般に対する民族の自立を目的とした支援活動の経過と現状について報告された。

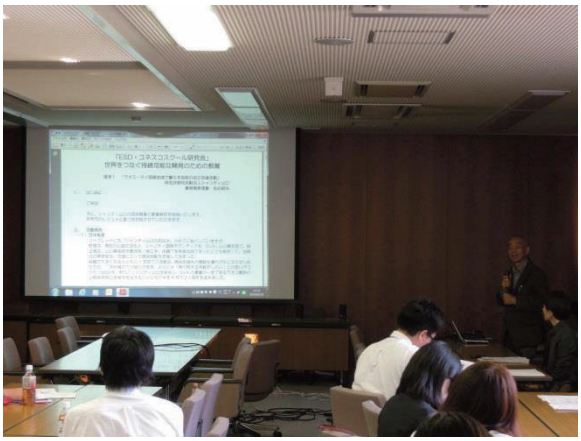

図１　佐伯昭夫氏による講演の様子

＜センサイ村における民族自立支援の展開＞

1992年からセンサイ村（110戸800人）において，保育園の開設と，園児80名へのタイ語，タイのしきたりやマナー（国旗の掲揚や挨拶の習慣化など）の教授を行ってきた。また，栄養失調を改善するための給食の提供や歯磨き，洗顔，手洗い，水浴など保健衛生の徹底，および保健衛生士の雇用と研修を実施し，生活の向上を目指した。経済的独立を目指し，女性グループによるコミュニティ形成，伝統刺繍の保存と換金製品の製作指導，ろ

うけつ染（藍染）の保存と技術の継承を促進させた。大人向けの識字・育児・保健衛生教育を実施した。さらに，農業指導を行い，タマリンドー，マンゴー，ショウガなど複合農業を導入した。

＜学生寮の開設＞

山岳地に居住し，貧困のために就学が困難な民族（モン族，ミエン族，アカ族，タイヤイ族，リス族）の中学生や高校生を対象にした学生寮を開設した。この学生寮は学校から徒歩10分圏内に位置し，生徒たちは畜産，養殖漁業，農業などの作業を行い，自給自足を目指した寮生活を送りながら学校へ通うことを原則とした。寮生活は，寮生が作成した生活規約に基づいて，寮生によって運営されている。

＜トイレの設営事業＞

衛生的な生活を送るために安全で安価なエコトイレを設置した。このトイレは，設置の指導を行うことで，原則として使用予定者が設営作業を行った。また，保育園においても保護者により設置された。このようなトイレの設置により伝染病や感染症などを防止するとともに，健康管理意識の向上も目指した。

＜農村開発と森林保全＞

農業研修や保健衛生セミナー，生活環境の学習会などの研修事業を行った。また，農業センターを設置・運営し，果樹の育成試験や栽培技術に関する研修，指導員の養成などを行った。さらに，持続可能な農業の推進や，安全な飲料水源の確保，洪水の軽減などを目指して，環境の修復と森林の再生事業を行った。

講演２「ESDの視点からの家庭生活に関する学習の転換」

日浦美智代氏（広島大学附属中・高等学校教諭）

本講演では，我々が抱える課題や生活の裏側にある問題について多様な角度からとらえることで，持続可能な家庭生活や日本の生活文化，そして将来に向けてどのように発展させていくかについて考えさせる授業実践について報告された。

図２　日浦美智代氏による講演の様子

＜高等学校家庭科におけるESDの導入・実践＞

・日本の食料自給率は39%と低く，食料の約６割を海外から輸入しているにもかかわらず，日本では年間約2000万トンの食糧廃棄物が出ている。このうち約58%が家庭から出ているものであり，家庭における食品ロス率は4.1%にもなる。このような現状を問題と考え，食品ロス，フードマイレージ，食料自給率，環境問題を意識した調理実習・授業が行われた。材料として，広島産ブランド豚肉の「幻霜豚」が使用された。「幻霜豚」は，広島県内のコンビニエンスストアの消費期限・賞味期限切れ食品を回収し，それを黒麹菌で発酵させた栄養価の高い餌を食べて飼育された豚である。本授業を通して，食糧問題を生徒一人一人が自分のことと

して考えていくことができると考えられた。また，身近な食べ物であるチョコレートを材料として自分たちの消費行動を見直し，地球規模の食糧問題に取り組む意欲や能力を育成するための教育題材の開発について報告された。

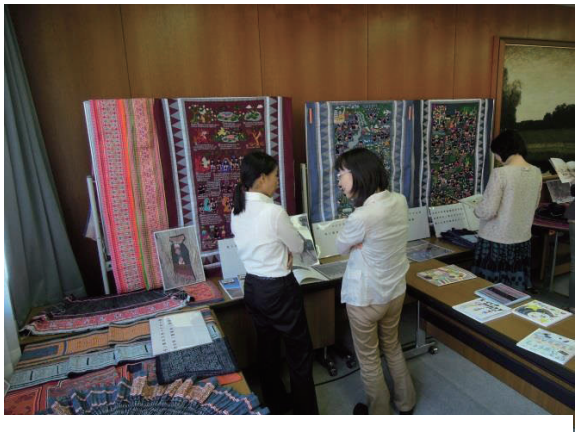

図３　モン族の刺繍の展示

・現在，日本では伝統的な衣料制作はほとんど行われなくなり，化学繊維によるものが主流になっている。そして，衣料は大量生産・大量消費が主流となり，廃棄衣料が膨大な量にのぼっている。しかし，我々の生活に身近で必要不可欠な衣料について，生産過程などはほとんど知られていないのが現状である。一方，モン族は刺繍の高い技術をもち，現在でも伝統的な手法で衣類などの布製品を制作している。そこで，モン族の伝統的な布製品の作成方法や衣類文化を高等学校家庭科の授業で取り扱うことにより，日本の伝統的な衣類生活について見直し，さらに異文化理解にまで発展させることができることが報告された。

＜実践の評価と考察＞

上記授業により，生徒たちは世界で生じている問題について現状をしっかりと認識し，身近な所から地産地消に取り組むことや，フードマイレージ，フェアトレードなど問題の解決に向けて自ら考えることができるようになった。世界の恵まれない環境に生活するこどもたちについても，自分のこととして考えようとする気持ちが育まれた。

講演３「開発途上国における教育開発の課題と国際社会の取り組み」

小塚英治氏（広島大学大学院国際協力研究科特任准教授）

本講演では，開発途上国における教育開発の課題と国際社会の取り組みについて報告された。

図４　小塚英治氏による講演の様子

・教育目標について

これまで，発展途上国の教育開発では，ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）や万人のための教育（Education for All: EFA）を行ってきた。しかし，現在，国際社会の動向としては，MDGsはPost-MDGsへと移りつつある。世界的に見ると，2008年から2010年の間に，サブ・サハラアフリカにおける非就学児の数は160万人増加した。また，世界で２億5000万人の子どもが４年生までに小学校を退学したり，あるいは４年生になっても読み書きができないのが現状である。これを受けて，国際社会の関心は「学ぶこと（Learning）」に移ってきた。

・学校運営プログラムについて

発展途上国の学校運営プログラムも変化しつつある。School Based Management (SBM)とは教員の人事や学校予算，カリキュラムなどの権限を政府から学校ベースに移譲することである。多くの場合，学校運営委員会が設立され，保護者などのコミュニティ・メンバーが学校の運営に関与する。近年では地方分権化の流れを受けて，世界銀行など援助機関は多くの国でSBMプロジェクトを導入している。JICAもアジアやアフリカでSBMプロジェクトを展開し，特に西アフリカで展開している「みんなの学校プロジェクト」は大きな成功をおさめている。

４．研究会の評価

広島県内では，広島県教育委員会等が積極的に実践事例紹介等によるESD推進に取り組んで来ている。そうした取り組みに対して，本研究会では「ESDは何か」ということや，ESDの視点から教育を考えたり授業を構成したりするための基本的な視座を得る内容の提供を目的としていた。そして生活全般に対する民族の自立を目的とした支援活動（講演１），教科教育におけるESDと支援活動の教材化（講演２），国際社会が取り組むべき課題とJICA等の事例（講演３）という三方向からの情報を提供した。その上で展開された全体議論では，ESDの要でもあるつながり作り・絆作りの重要性を一同で再確認することができたといえよう。

研究会後のアンケートでは，表１のような結果が得られた。（回答者：28人／46人）

表１　研究会後のアンケート結果

質問１	ご勤務の学校についてお尋ねします。 小学校:６名／中学校:２名／高等学校:４名／大学:５名／大学生・大学院生:６名 高等専門学校:１名／行政関係:２名／その他:１名／無記入:１名
質問２	性別についてお尋ねします。 男性:13名／女性:15名
質問３	年齢についてお尋ねします。 20代:７名／30代:５名／40代:７名／50代:５名／60代:０名／70代:１名／無記入::３名
質問４	研究会の開催をどのようにしてお知りになりましたか。 広島大学公式ウェブサイト:３名／ポスター:６名／チラシ:８名 ロコミ:７名／その他（職場での紹介，web，案内状等）:５名／無記入:１名
質問５	本研究会の内容に興味をもっていただけましたか。 十分:18名／やや十分:８名／どちらとも言えない:２名／少し不足:０名／不足:０名
質問６	本研究会の内容によってESDについての理解は深まりましたか。 十分:15名／やや十分:10名／どちらとも言えない:２名／少し不足:１名／不足:０名
質問７	本研究会の内容は今後，ESDを実践しようとした時に役に立つと思われますか。 十分:17名／やや十分:９名／どちらとも言えない:１名／少し不足:１名／不足:０名
質問８	本研究会に参加されたことにより，今後学校教育においてESDを導入したり，発展させることに寄与する視点を得ることができましたか。 十分:11名／やや十分:12名／どちらとも言えない:０名／少し不足:０名／不足:０名

無記入:5名

質問９ 今後，ESDに関してどのようなテーマの研修会に参加したいですか。

実践紹介や交流:６項目／教材化:１項目／カリキュラム:１項目

教科教育:３項目／「幸福」「生活」「将来」等のテーマ:３項目

質問10 本研究会に参加されて良かった点など，ご感想を自由にお書きください。

●良かった点に関する記述:22名（学校関係者以外の実践を聞けた／教科におけるESDの取組を聞けた／自分の視点のバージョンアップになった　等）

●課題・改善点に関する記述:３名（参加者の少なさに対する懸念／研究会全体の意図が不明確／学校教育との直接的なつながりの薄さ）

●要望等:３名（連携したい／多様な機関とつながりたい／今後も続けて欲しい）

研究会は概ね好評を得ており，参加者から有意義なものであったと評価されている。その中で，学校・大学・JICAやNPO法人等の団体等，機関の別を超えてつながりたいという要望や，そのコーディネーターとして広島大学に機能して欲しいという意見が見られたことは特徴的である。それは，学校の中のみに閉じこもるのではなく，外に目を向け，様々な場所で多角的にアンテナを張ることで新しい教材を開発し続けることの重要性が共有されていたということを意味するだろう。また，総合的な学習の時間を使用して行われることが多いESDを，家庭科のように特定の教科においてどう実践するのかということは参加者の関心を強く引きつけていた。教材開発の具体が見えやすかったということと同時に，教科におけるESDの姿は新鮮なものに映ったとも考えられる。

本研究会において，そのようにあらゆる現場で実践を展開する者同士が集い，互いにつながりあうことの意義と可能性を見出す機会を提供できたことはひとつの成果だといえよう。そうした可能性を見出し見つめる「眼」の獲得は，形として捉えることができるわけではなく，また実際の実践活動を構想する上ではほんの微々たる一歩のように見えるかもしれない。確かに実践として形になったものを提供することは内容としても分かりやすく，「明日使えるもの」を求める多忙な学校現場から具体的な実践事例を知りたいという声があがるのは当然のことである。実際に参加者から，「もの足りなさ」「分かりにくさ」を感じたという意見が寄せられたのは，本研究会で実践事例の紹介を主な目的としなかったことに因ると推測される。しかし，具体的な教育実践活動を組み立てようとした時，そこには必ず何らかの理論・哲学が求められるはずであり，研究機関である大学として，教育を見直し再構築するための「哲学」としてESDを普及させていくという姿勢もひとつの使命である。これは今後大学としてESDに係る研究会を企画立案する上で土台とするべき信条のひとつを獲得したと評価できる。

本研究会への参加者は46人であり，初めて開催された昨年度よりは数を伸ばしているものの，当初予定されていた人数に比べてこれは決して多いといえる数字ではない。そもそも学校教育現場・世間一般におけるESD・ユネスコスクールについての理解が依然として浸透していないということもその背景だと考えられる。しかし喫緊に検討すべき課題は，県内に多く存在する多様なユネスコスクール支援機関との連携・棲み分けの徹底である。本研究会を含め，県内には類似する研究会・研修会は数多いが，そのどれもが「ESDの推進」という漠とした大きな目標を掲げており，その実現のためにそれぞれの団体が担う役

割や特徴などが分担・明示・共有されているとは言いがたい。今後は，そうした支援体制同士の情報共有と役割分担のために議論を重ねることが求められるだろう。

（富川 光*・中井 悠加*）

Ⅴ　研究の成果と今後の課題

本年度の成果と課題をまとめると次のようになる。

（１）学校現場とつなぐ ESD に関する研究会及び研修会のあり方

本年度，教育学研究科ユネスコスクール委員会主催で，主に小・中・高等学校教師向けの研究会を開催した。日頃，見聞きする機会の少ないラオス・タイ国境地域で暮らすモン族の生活や広島大学附属中学校の生徒が製作した絵本を通じてのモン族の子どもとの交流など，研究会の講演内容は参加者にとって新鮮であり，大変好評であった。このような研究会を次年度以降も持つことが期待された。

大学以外の研究会としては，「東広島 ESD 研究会」が開催され，ユネスコスクール委員会委員がシンポジストとして参加した。ESD・ユネスコスクールの普及・推進のために大学及びそれ以外の ESD・ユネスコ関係団体が独自に支援できる内容と連携して支援できる内容とを精査し，支援の質的向上と量的拡大をめざした緊密なネットワークを作ることが課題であると考える。

（２）ESD・ユネスコスクール加盟申請書の作成支援について

ESD・ユネスコスクールの普及・推進のために加盟申請の支援を行うことは教育学研究科ユネスコスクール委員会に課せられた使命である。しかし，申請校の中には ESD・ユネスコスクールの理念や意義を十分:に理解しないままに申請を急ぐ場合が散見される。ACCU を窓口とした申請制度の評価と見直しも含めて，申請の効率的なあり方を検討する必要がある。また，申請後，どのような授業実践が行われ，いかなる成果を得たのかが十分:に把握できていないという問題がある。ESD・ユネスコスクール申請後，当該学校における実践の指導や評価などについても，大学が積極的に支援していく必要がある。

（柴　一実*）

参考文献

文部科学省/日本ユネスコ国内委員会(2014a)「2014年ユネスコスクールESD優良実践事例集」ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

文部科学省/日本ユネスコ国内委員会(2014b)「ユネスコスクール世界大会－第６回ユネスコスクール全国大会－抄録集」ユネスコ世界会議関連事業

ユネスコスクール/日本ユネスコ国内委員会Webページ：
http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339976.htm(2015年１月10日確認)

ユネスコスクール世界大会全国大会宣言起草・事例選考委員会「ESD推進のためのユネスコスクール宣言(ユネスコスクール岡山宣言)」(宣言案　Version２)(2014)